

今回は、3年ぶりに最優秀賞作品が選ばれました。受賞作「セピア色の世界で」は、なんというか、文学的偏差値のとても高い作品だと思いました。単にストーリーを考えるのではなく、それをどのような構成で展開させるのかということをご構想していった力量は、確かに稀有なものがあります。ただ、その試みがすべて成功しているかということ、そこは微妙です。

例えば（以下、やや細かくなりますが）、冒頭「思えば……」の文と「川べりの道を下って」の文との間の一行空きは必要でしょうか？ それから「俺はこの小さな旅のきっかけになった出来事に思いを馳せた」の後、一行空いて（これは必要）、時間が少し戻り、「黄色や青に、茶色」のところで元の時間に戻りますが、この部分ピタリと戻ったのか、少し時間が進んだのかがわかりにくい。そして、その前の「結局は、ふてくされた子供のバカみみたいな家出だったのだ」という一文は、どの時点から（振り返って）語っているのかが、不明確です。こういう時制を混乱させる文が挟まると、読者は落ち着かなくなります。つまり、読者はそのあたりを頭の中で操作して作品についていかなければならないので、僕もそうでしたが、その辺の〈具合〉を飲み込まないと、なかなか作品世界にうまく入っていけない結果になります。但し、そこをクリアすれば、湊と追いかける彩音の両方に寄り添いながら作品世界を楽しめ、全体としてロードムービー的な楽しさや、湊の絵に対する思いを通じての芸術論談義的なおもしろさもあり、そのあたりを含め「文学的偏差値が高い」と思ったわけです。但し、この作品のもっとも大きな仕掛けである、湊が色弱だという設定が、最終的にこの作品に力を与えているかどうかということは、これも評価として難しいところです。この設定なしにこの作品を成立させたい、という考え方もあるように思いますが、僕はこの設定が、つまり湊に世界がどう見えているかということが、色弱という設定を越えて読者に迫ってくるかどうかという問題だろうと思いました。外国作品も含め、たくさんの作品に触れて、作品世界の作り方を学んでください。

奨励賞の「ペルセウスの約束」もいい作品でした。一人称で、主人公の心の動きを過不足なく、つまり説明過ぎず、言葉足らずでもなく描けていて、多くの読者が共感して読める作品になっていると思いました。ただ欲を言えば、その語りのリズムがずっと同じなので、全体として読者はこの主人公からずっと「話を聞いている」感じになります。どこかで読者がその語りを忘れて場面に向き合えるようなところ如果能したら、作品として更にグレードアップできると思います。

もう一つの奨励賞「鉄の赤んぼう」は、文章には難点がありますが、魅力のある作品でした。作品に書き込まなくてもいいのですが、〈私〉がどんな人物なのかということが作者の中でもっとイメージされれば、さらにいい作品になると思いました。